



## 「女性婚」を生きる ——キプシギスの「女の知恵」を考える——

小馬 徹 著

横浜 神奈川大学出版会 2018年 238p.

本書は、ケニアのある社会集団のあいだで伝統的に行われてきた女性同士の結婚（「女性婚」）をとりあげ、その制度と実践を、関連する諸制度とともに詳細に記述し、分析した論文集である。

その社会集団——キプシギスという——の「女性婚」では、自身の閉経や子の死亡などにより息子がいない状態の女性が「夫」となり、婚資を払って別の女性を「妻」とすることができる。

「夫」は性的後見人（男性）の力を借りて「妻」を妊娠させ、男児を得ることが可能となり、生まれた男児は正確には「夫」の「孫息子」とみなされるという。この制度の背後にあるのが、キプシギスの「家財産制」である。一夫多妻制を基本とするキプシギス社会では、異性婚の夫（男性）が死んだ場合、複数ある「妻の家」が夫の財産を均分する。ただし、均分した財産を実際に相続するのは妻たちではなく、その息子・孫息子たちである。このように男性だけによる相続を原則とするキプシギス社会では、「女性婚」の存在は息子がいない女性にとって一種の福祉制度として機能する、と著者はその重要性を説く（p.115）。

キプシギス研究の第一人者である著者は、自らに人類学者としての使命があるといい、それは「権力を孕む「非対称性の闇」からアフリカの人々の肉声を先ず救い出して、些かでもアフリカと外部世界のあいだの均衡と対話の復元に努めること」だと述べる（p.192）。そうした姿勢のもと著者は、キプシギスの伝統的な結婚や性愛のあり方とその変容を辿り、批判されがちな「女性婚」を上記のように再評価するだけでなく、「女性婚」の「妻」に女性を従属的な地位から解放する「魅力的な地位」としての側面があるとして実例を示す（第2、3、5章）。さらに著者は最終章においては、LGBTを排除し反同性愛法を推し進めるアフリカ諸国の趨勢について、「ヒトの種としての存亡」という観点を用いて肯定してみせている。そこで何度か引用されるのは、「同性婚（を結婚として認めること）は人類の死だ」という「ケニアの穏健な庶民の知識人」の発言である（p.210ほか）。ヒトは子を成すべきか、子を成さない多様な生のあり方をどう捉えるか——「女性婚」を入り口とし、生殖に関わる論争的なテーマについて旗色を鮮明にした本書の議論は、いずれも挑戦的である。本書が様々な議論を喚起することを期待したい。なお本書にはこのほか、女性婚の「夫」の内面にあり得る葛藤に接近した第4章、未婚の母たちの相続が可能になりつつある実態を紹介した第6章があり、キプシギスのひとりひとりの生が手厚く書き込まれている。

津田 みわ（つだ・みわ／アジア経済研究所）

